

立命館大学・神奈川大学 21 世紀 COE プログラム ジョイント・ワークショップ

『歴史災害と都市—京都・東京を中心に—』の発刊にあたって

The 21st Century COE Program of Ritsumeikan University and Kanagawa University: Fruits and Expectation for Joint Workshop "Historical Disaster and Cities: Case Studies of Kyoto and Tokyo"

神奈川大学長 山火 正則

YAMABI Masanori (President of Kanagawa University)

I am pleased to have had the report compiled of the joint work shop of Ritsumeikan University and Kanagawa University during August 26 and 27 of last 2006 at the Queens Tower A, Minatomirai, Yokohama.

The theme "Historical Disasters and Cities" seemed to have appealed many people here in Yokohama where the Great Kanto Quake occurred more than eighty years ago. Moreover, we were able to learn how Kyoto has built up its cultural tradition with many efforts through this joint work shop.

I hope the common theme of COE programs between the two universities will enhance the deeper involvement and the further research development.

この度、昨年（2006年）の8月26・27日に横浜市西区みなとみらいのクイーンズタワーAで行なわれた、立命館大学21世紀COEプログラム「文化遺産を核とした歴史都市の防災研究拠点」と、私ども神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」のジョイント・ワークショップ『歴史災害と都市—京都・東京を中心に—』の報告書がまとめられ、ひとつの形ある成果として世に公にされようとしていることをまずは喜ぶたい。

神奈川大学21世紀COEプログラムにおいては、他大学の21世紀COEプログラムとの間にジョイント・ワークショップを開催することは初めての試みであったが、立命館大学側の全面的な協力によって、これを盛会裏に行うことができた。ここに改めて立命館大学21世紀COEプログラムに対し感謝申し上げる次第である。また、このユニークなワークショップのきっかけを作られた立命館大学の吉越昭久先生と神奈川大学の北原糸子先生にも改めて感謝申しあげたい。

この「歴史災害と都市—京都・東京を中心に—」という企画が、いくつかのマスコミに取り上げられ、また多くの方々に参加していただいた理由のひとつは、やはり、横浜という土地が関東大震災を経験し、また、地震災害よりもその後の火災発生によって膨大な死者を出した東京と比べても、震災自体の被害がより激甚であったということから、このワークショップのタイトル「歴史災害と都市」がある種のインパクトを持って迎えられたからであろう。

また、研究の中味という点においては、京都の歴史災害を対象として、わが国が育んできた貴

重なる文化財を防災の観点から今一度捉えなおそうという現代的課題に挑戦され、多くの成果を上げてこられた立命館大学 21 世紀 COE プログラムが主催者のひとつであったことがこの企画の成功に大きく貢献したと思われる。他方、関東大震災については、神奈川大学 21 世紀 COE プログラムが、その発足の 2003 年段階において江戸時代末期の安政江戸地震と歌川広重の『名所江戸百景』作成の関連について新しい解釈を試みた研究を行い、さらにそれを 2006 年段階では関東大震災の写真を「非文字」資料と捉えた研究へと進展させた成果を持っていたことが大きい。この度のジョイント・ワークショップは「災害」をキーワードとした双方の大学の研究成果の披露としても意義深いものであった。

現代社会の不安材料のひとつである災害を文化の領域から奥深く迫る研究は、ややもすればハード対策のみでこと足りると考える防災を、社会がもつ仕組みそのものから考えなおそうとする壮大なプロジェクトである。両大学とも、21 世紀 COE プログラムという恵まれた条件下での研究遂行がこうした新しい試みを結実させたものとする。

神奈川大学は早くから日本の私立大学の使命として、学生の教育と共に、世界的な学術研究の発展とその発信の重要性を認識し、1981 年には日本常民文化研究所を招致し、1993 年にはそれを母体として、学部に基づかない大学院歴史民俗資料学研究科というユニークな研究教育組織を立ち上げ、今日に至っている。21 世紀 COE プログラムは来年度で最終年を迎えるが、神奈川大学としては本プログラム終了後も「神奈川大学非文字資料研究センター」の形成に鋭意努め、日本常民文化研究所とともに、人類文化研究の世界的な教育・研究拠点として、責任を果たしていくつもりである。

今後とも立命館大学との連携が一層深められ、より大きな学問的成果がもたらされるとともに多くの若手研究者の育成にも大きく貢献することを期待してやまない。